子どもの視線から空間をデザインする

向山陽子

五年前、園舎園庭の改築にあたりその設計からかかわるという機会に恵まれ、本年三月には新園舎・園庭で育った子どもたちが初めて卒園しました。

幼児期の育ちに必須・多様な体験を保証する空間作りに携わることは、保育者として幸運であり、また、設計士と施工業者とのプロフェッショナルで刺激的な時間をもつことにもなりました。そして、二度の引っ越し、借り園舎での一年、新しい環境での三年は、保育者たちにとって、子どもたちの安定を第一に、日々保育内容を問い直しながらの試行錯誤と学び直しのときでもありました。

「改築」という作業は、環境にかかわり、遊びに遊びながら、自ら育ち学ぶ子どもたちの実現のために、多方面の多くの専門家が力を結集し、同窓生たちが注視するという、園の歴史の、大切な節目でありましょう。

自然の教育力

水・土・光・風・雨・太陽・動植物と響き合い、かかわり合ってほしいと、私は願っていました。

初夏の六月、梅雨の湿気を含んだ、緑と生命いっぱいの園庭で、子どもたちが泥・砂・水遊びに喜々

◀写真２：園庭へ続く玄関

写真１：テラスで遊ぶ▶

として興じています。昨日はトンボの羽化にじっと見入っていた子どもたちが、手作りの虫捕りグッズを手にアゲハチョウを追いかけています。この庭で生まれた生命はありがたいことにまたここに生命を連ねてくれます。苗が揺れる小さな田んぼの隣では、百五十五個のジャガイモが採れました。いただきま～す。

東京、文京区の住宅地にある園を一歩出ると、アスファルトとビルばかり。この地域で育つ子どもたちの幼児期に必要な環境をと、井戸水の恵みを活かして、池と流れに水棲動植物を、また排水設備を地中に凝らし、地表には荒木田土を敷きました。

二本のケヤキの木では、テントウムシの変身が、またキンカンやスダチにはアオムシが、子どもたちに見つめられながらアゲハチョウになって飛び立ちます。

秋には、楓が紅葉し、ケヤキの落ち葉でたき火の

日々が続きます。収穫した柿で干し柿がつるされ、稲刈り・籾取り・お餅つき・注連縄作り……そんな自然の営みが園舎内にいても感じられ、雨の匂いや音で園庭に誘われるように、窓や出入り口、とりわけテラスを広く取りました。（写真1）

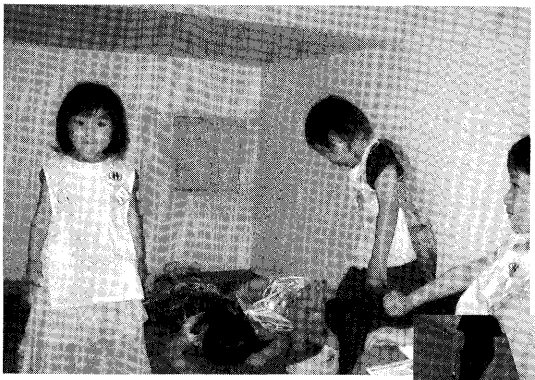
この時世なので、防犯のための守りは固めましたが、玄関を入ると庭の自然が存分に感じられるよう、そして朝、年少・年中児は庭を感じながら保育室へ行くよう導線を取りました。（写真2）

異クラス・異年齢交流の共有空間

①広場（ホール）

園庭でも園舎内でも、いろいろな高さから見える世界の違いを体験してほしいと願いました。上がって下りる**広場（写真3）**の段差には、積み木の収納を兼ねました。取り外し可能な滑り台は、さまざまな姿勢で遊ぶ子どもたちの大好き場所です。たくさ

▲写真3：広場・紙飛行機



◀写真５：穴ぐらで遊ぶ子ども

写真４：穴ぐら▶

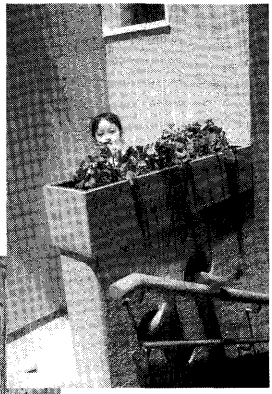
んの積み木が段差を利用して構築されることもあれば、紙飛行機を飛ばす場になったり、舞台としてごっこや劇遊びに使われることもあります。

改築後の保育初日に、花嫁さんになったFちゃんがブーケを手にしずしずと段を降りていたのが思い出されます。年少から年長までが、刺激し合う場となっています。

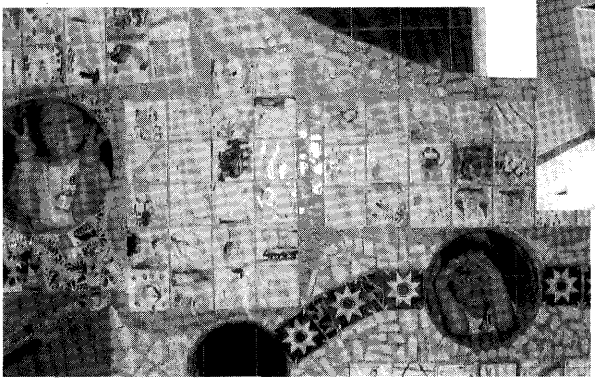
②対面する保育室と、共有空間の活用

年中・年長になれば、隣のクラスで行われていることにも興味をもちます。そこで共有・交流ができるといいなと思い、保育室の扉を開け放つとクラスを超えて一つの空間になるように、また集まりの時間など独立したいときにはクラス空間が確保できるようにしました。それに伴い、教師間の連携と協働、クラスの保育内容の独立性と共同性が新たな課題となっています。

写真6：踊り場の穴▶



▼写真7：間仕切りから“つながる”



③魅力的な穴・狭い場所

あちらこちらに、体を包んでくれるような狭い空間をつくりました。**(写真4・5)**いつも何人かがたむろしている、ちょっと秘密めいた階段下の空間では、入れてもらうのを臆するような子どもの時間と空間が繰り広げられています。**階段踊り場（写真6・7）**も子どもたちが大好きな場所で、間仕切りには穴を開け〝つながる〟ようにしました。

材質と色

園舎に使う色は、園舎から見える園庭の木々の緑の邪魔にならない色、子どもたちのそれぞれの色や子どもたちの活動から生み出される色の邪魔にならない色と考え、やはり木と土の色が基本になりました。材質も、地球がもっている自然素材が基本になりました。

どうしても**珪藻土**の壁が欲しくて、触感を吟味し

ました。そしてトイレだけは、タイルの色で遊びましたが、日本のタイルは色が淡すぎるので、輸入タイルのきれいな色を選びました。

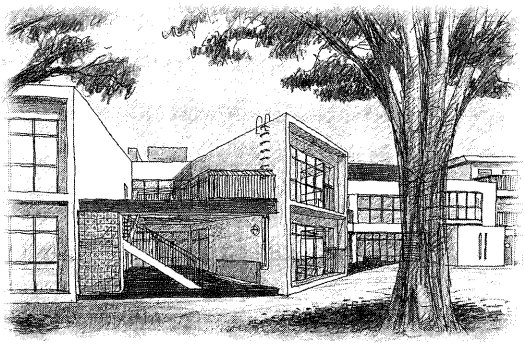
線と、上下の空間

「自然界に直線はないのでは?」とずっと思っていた私は、斜めの線、曲がった線、それでいてバランスがとれていることを意識しました。

二階リズム室は天井をスケルトンにして空調設備や鉄骨を見せ、頭上に空間をとりました。

また、床下収納をあちらこちらに設けています。「職員室の床下には、園長先生のお部屋があって、その下にはお化けの国が広がっていて、夜になると園長先生はお化けと遊んでいるそうな……」これは、子どもたちに信じられている伝説の一つです。

保育の空間は、子どもたちの育ちの時期によって、遊びによって、子どもたちと保育者によって使いこなされ、変えられていきます。そのような出会いがあってこそ生きてきます。土で遊ぶ・音で遊ぶ・風と遊ぶ・光と遊ぶ……。そんな空間を子どもたちと紡ぎだしていきたいと、今後の空間の変容が私は楽しみなのです。

「内側は外側よりも大きい」ことを、子どもたちは、建物作りに夢中だった私に教えてくれました。

（大和郷幼稚園　園長）